



TITLE:

私事

AUTHOR(S):

吉川, 幸次郎

CITATION:

吉川, 幸次郎. 私事. 静脩 1964, 1(1): 1-2

ISSUE DATE:

1964-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36205>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静修

1964年 9月

Vol. 1, No. 1

創刊のことば

図書館は図書館利用者のために在る。大学図書館は主として研究者と学生のためにある。京大図書館は、部局図書室を含めて、220万に余る蔵書数を誇り、多数の貴重な文献・資料や特殊文庫の所蔵でその名を謳われている。けれども反面に、この蔵書のための図書館に墮する傾向がなかつたか。蔵書のための図書館から利用者のための図書館へ、ここに大学図書館近代化の基本的な問題がある。

この問題の解決には利用者側の理解と協力が絶対に必要である。例を指定書にとつて見ても、これは教官の学生に対する学習指導上の事柄であつて、図書館はそれに協力する立場にある。一般に文献・資料を蒐集整理し、情報活動を活潑にして、積極的に利用者に奉仕する態勢を整えることは図書館の仕事であるが、この仕事は、個々の教官、各教室、各部局の理解と協力を得て、はじめて完全なものになる。

京大図書館報「静修」の刊行を企てたのは、単なるPRのためではない。図書館と利用者とのコミュニケーションの道をひろげ、もって大学図書館近代化問題の解決に資しようとするにある。希わくは利用者各位の御協力と御支援を賜わらんことを。

(付属図書館長 堀江保蔵)

私 事

吉 川 幸 次 郎

私も学問をするものであり、学者のはしくれであるからには、多少の書物を、個人の蔵書としてもっている。30何年前、ベキンに留学生としていた昭和のはじめは、浜口内閣の時代であり、その政策のせいであるのかどうか、また当時の国際経済情勢がどういう風の原因として働いたか、すべて知らないが、私ども留学生にとってあり難いことは、月額日本金200円の留学費が、当時銀だけであつたむこうの金に直すと、2倍以上の5百何十元かになることであった。今の金ならば、20万円ぐらいであろうか。少くとも、3年の留学

をおえてベキンを引きあげた昭和6年の春ごろはそうであり、何でも有史以来の銀の暴落ということであった。唐さんという中国人の家に寄宿していた私の生活費などは問題でなく、おかげで存分に本が買えた。聴講生として通っていた北京大学の講義がすむと、ほかに行くところもないので、古本屋を回った。最大の書店街の琉璃廠では来薰閣、もう一つの書店街の隆福寺では文奎堂が、もっともなじみであった。夕方まですわりこみ、晚めしの御馳走になることもあった。留学費は3カ月分まとめて来る。今の金で5,60万円がとどく。手もとにおいておいてもしょうがないので、ある晚めしのおり、来薰閣の主人陳済川に、君にあずけておこうかという、彼は顔をかがやかせて感謝し、いくら利息をさしあげましょと、真顔できいた。利息はいらない、よい本が出たら、さきに知らせてくれという、一そう感謝された。しかし後学のため、ここの利息はいくらぐらいかときくと、銀行は貸してくれず、町の金融業者からだ、毎月1分2と答えた。1分2という中国語が1割2分を意味するとすれば、大へんな高利だと、感心した。そうしたわけで、ベキン留学中の私は、俄か分限であった。こちらから本屋へ出かけるばかりでない。朝おきると、本屋の番頭が門番の部屋で待っている。多いときは5軒10軒、私はつぎつぎに引見し、藍色のフロンキをひろげさせる。ねぎらないのを原則とし、初めての本屋にはそのことを説明して、正直なねだんをいわせる。帰国するときには、途中、江南を回ったが、その旅費としてまた500円もらった。買いためた本を郵便小包何百包かにして日本へ送るのに200円かかったが、あとの大部分は、さいごの購書の資金となった。そうしてもって帰った本が、今の私の蔵書の中心となっている。ただし戦後、大分売りもした。しかし蔵書の半分以上は、やはりその時の本である。なお事のついでに書いておけば、私に留学費を下さったのは、上野さんという京都の実業家が、主として中国学のためにと、京都大学に10万円を寄付された金の利子であると聞いた。私ばかりでなく、現在中堅の学者である何人かが、この金で中国へ留学した。今はどうなっているかと、いつか学生課へ聞きにゆくと、基金はたしかに保管しています。ただしみな南満州鉄道の株券です。もう一度値が出たら、お役に立てましょとの話であった。

そうしたことで、またその後はあまり本を買う能力がないが、それにしてもやはりぼつぼつと買った本、また人さまからももらった本が、ちょうど本の脊にいつのまにかたまるほこりのように、たまりたまって、私の蔵書はある量になる。ところで私は近ごろそれに厄介を感じている。個人の蔵書のもつ制約を、しみじみと感じている。ほしい本が存分に買えないという制約ばかりではない。整理の制約である。せまい書庫に乱雑にはうり込んだもの、ことに零細なものは、どこにどうおいたか、それをさがすのに、半月つぶすことがないではない。けっきょく自分ももっていることはたしかなのに、図書館から借りること、またしばしばである。図書館ならば、カードをくれれば、すぐ借れる。

つまらない私事を書いて来たのは、何でもよいからという館長堀江さんの依頼の言葉に甘えたからでもある。文学部紀要のための執筆に、この夏休みはあけてくれ、この原稿のための余裕をもちにくかったためでもある。しかし実は、個人の蔵書のもつ制約を語り、それと対比してもつ公共図書館の便利さ、それを強調したかったからであった。残念ながら強調するための時間はなくなり、紙数もおそらくはない。強調は館の関係者にまかせるとしよう。(文学部教授)

—— 学生との図書館懇談会開く ——

図書館が大学にとって不可欠な施設であることはいうまでもないところで、これの改善・充実については常にいろいろと努力

されてきた。図書館利用者のうち最も大きな比率を占める学生諸君の意見や希望を聞いて、これを改善策の参考にしたいという